

令和5年度

街角アート展

日時 9月15日(金) 正午～
9月21日(木) 午後5時
場所 長野駅コンコース

信州大学教育学部

図画工作・美術教育コース作品展

出品作品

流動

1

野崎 優希

モチーフはアシカです。
優しくなら触っていただいて構いません。

(楠・W35×D21×H45cm・10kg)

ナミダ

2

小村 夢美

木彫でナミダを表しました。この作品から
ナミダの美しさをきっと感じることが
できるでしょう。

(楠・W35×D35×H55cm・25kg)

『流』

3

太田 さくら

水は「洗い流す」という働きがあります。
日々の疲れやストレス、そんなものたちから
解放されたいなあと思います。

(テラコッタ・W25×D27×H44cm・11kg)

燃烧

4

先田 奏音

熱はものを爆発させる力を持っている。し
かし、そのような強い火にかけられても残
ってきたものがある。

(テラコッタ・W19×D21×H34cm・15kg)

心に秘めるもの

5

前田 彩

苦しいことはきっとあるけれど、それを見
せずに、強くしなやかに生きる姿に憧れて
います。その美しさを表現したいと思いま
した。

(テラコッタ・W16×D23×H40cm・6kg)

炎

6

森下 なみ

モデルの確かだが静かな迫力と目力の強
さが印象的だったため、その様子を炎に託
しつつ表現しようと試みた。

(テラコッタ・W14×D20×H37.5cm・7kg)

涼感

7

山本 真生

水の透明感による涼やかさをガラス質の透明釉で仕上げました。
長く続く暑い日々が少しでも和らぐような印象を与えられることを願います。

(陶器・W60×D60×H2cm・1.5kg)

祖母

8

山本 真生

表したのは、私が 22 年間共に過ごしている祖母。
その「やさしさ」、「頑固さ」は時間と共に積み上げられ、その人物を完成へと近づけていく。

(檜・W40×D40×H20cm・2kg)

往時の味わい

9

河路 琴葉

古代エジプトをイメージしたワイングラス 3 点です。
当時の上層部や神々が使うことを想定してつくりました。

(陶・W25×D25×H15cm・0.9kg)

構造美 I

10

松本 優雅

自然が作り出す構造美を探求しています。
中でも生物の色や形などの構造美を表現したいと思い、今回はシマウマに注目して制作しました。

(銅・W10×D30×H20cm・0.3kg)

弾み

11

瀬戸山 理彩

カバの見た目とは対象に凶暴な面を、球体と組み合わせることで、何かの弾みに動き出してしまうような不安定さを表現しました。

(スタイロフォーム・粘土・紙
W55×D45×H84cm・3kg)

ひだまり

12

上村 恵美

太陽を見上げているひまわりをイメージして作った。頭を少しかしげて、うとうとしているかのような形がポイントである。

(発泡スチロール・絵の具
W55×D55×H70cm・1kg)

歩み

13

山本 那由

自分は今まで様々な思いを抱えて生きてきた。これからも一步一步踏みしめて生きていきたいという思いを作品に込めた。

(石粉粘土・アクリル絵の具
W48×D25×H30cm・3kg)

空を飛べたら

14

上村 恵美

ペンギンの左右に揺れながらゆっくり歩く姿をイメージして作った。表面を滑らかさとゆったりとした曲線がポイントである。

(檜・W19×D14×H20cm・0.62kg)

月をめざして

15

北原 琉愛

月のうさぎをイメージに、下部の台座で雲を表現して、うさぎが雲間を抜けながら空を飛んでいく様子を表しました。

(檜・W12×D12×H27cm・0.62kg)

悠然

16

小山 萌恵

亀のゆったりとした動きを表現した。亀をモチーフにするにあたり、私が最も魅力的だと感じたのは甲羅の模様や色彩だ。そこで、凹凸や模様の彫跡を活かすために、仕上げはバーナーを用いた。また、甲羅の艶出しにはミツロウを用いた。

(檜・W12×D27×H11cm・1kg)

解凍

17

瀬戸山 理彩

動物の暖かさから氷が溶けていくようなイメージでこの作品を作りました。

(檜・W24×D38×H16cm・1kg)

海底移動

18

手塚 陽菜

海底を這うタコの動きを表現しました。色のむらや表面の凹凸がわかるように色をまばらに塗りました。

(檜・W18×D14×H20cm・1kg)

赤い靴

19

當房 ありさ

速さを魅せるお洒落は足元から。木の義足で歩かなければならないとしても、少女の頃の憧れはそのままと願って。

(檜・W7.9×D22.8×H11.1cm・0.3kg)

やわらかな速度

20

中谷 柚吉

幼虫の可愛らしさと柔らかな動きを表現しました。幼虫は動きが遅いようで、目を凝らすと細部はせわしく動いています。

(檜・W15×D28×H20cm・1.5kg)

翡翠

21

西澤 希美果

カワセミが水から飛び出てくる瞬間を、川波を用いて躍動的に表現しました。

(檜・W24×D8×H13cm・0.65kg)

海底を這う鮐

22

二井 一紘

海底を非常にゆっくりと這うヒラメを作りました。ヒラメは海底に擬態するかのよう静かにしています。しかし、ヒラメの持つ背びれや尻びれはわずかに揺れ動いているように見えました。静止と運動が感じられるように形を作りました。

(檜・W30×D20×H10cm・0.5kg)

瞬く

23

前口 ちひろ

猫が何かを避ける時にみせる、一瞬の流れるような素早い動きを表現しました。

(檜・W13×D12.5×H29cm・0.58kg)

速さ

25

山崎 光槻

速さという概念をそのまま形に落とし込みました。

(檜・W12×D12×H29cm・1kg)

進んでいく

26

松本 凜

抱き上げたくなくなるようなゆっくりと歩く子猫をイメージして作成しました。

(檜・W10×D22×H10cm・0.66kg)

馬と少女

28

猪瀬 昌延

他者の存在を意識し、寄り添いながら生きる姿を表現しました。

(乾漆・W37×D37×H60cm・6kg)

跡

24

水口 楽都

この作品は「速度」を題材とした作品である。はやさに関連するものとして動きを連想しやすかったが、今回着目したのは彫刻で「速度」を表すことだ。形に美を求める彫刻として静止したように1つの形に固定するのが彫刻と考えている。その条件で考えたものが、速度の「跡」だ。私の考える「速度」は、早く動く対象そのものは目で追えることはできず、砂ぼこりや土を蹴る音、風を切る音などの周囲の影響を認識することでようやく「速度」を感じ取れる。ゆらゆらと素早く、激しく揺れる炎は軽く、弱々しい風でさえゆらめき方を変えていく。その炎が形を変えることなく、中心に穴を開けているのがこの作品である。形を崩さず、しかし炎の中を進んで穴を開けるほどの「何か」がこの作品の主題であり、見る方々は通り過ぎたものをそれぞれで想像してもらえるとありがたい。

(檜・W11×D12×H16cm・0.66kg)

ボールを投げる女の子

27

宮沢 明里

力いっぱい投げられたボールは、きっとゆっくりと落ちていくでしょう。うまくできないことを一生懸命やろうとする子どもの愛おしさを表現しました。

(檜・W13×D13×H30cm・0.5kg)

問 長野市文化スポーツ振興部文化芸術課

TEL 026-224-7504

FAX 026-224-7351

E-mail geijutsu@city.nagano.lg.jp